

菅澤 聡 『ゆとり教育』がもたらした影響とこれから ～ゆとり教育は必要なのだろうか～

近年、「ゆとり教育」と「新しい学力観」をめぐって、日本では大きな論争が続いてきました。一方では、詰め込み教育への批判が根強く、子どもたちに生きる力をつけることこそが本当の教育だとする主張があり、他方には、「ゆとり教育」によって子どもの学力が下がって、国際的にも学力の順位が下がってしまったとする批判があります。

これは、そもそも「学力」とは何かという根本的な問いを含んだ論争ですが、どうしても試験の成績や偏差値、順位のような「見える学力」で学力を測られがちで、生きる力やコミュニケーション力のような「見えない学力」は分かりにくく、世間一般では評価されにくいように感じられます。それが、「ゆとり教育」の見直しと新学習指導要領につながっているのかもしれない。

教育論は、「～をすべき」という規範論に立脚した学問なので、教育観・学力観の違いが非和解的な論争を生じ、論者がそもそもどちらの立場に立つのかによって、結論もまるで違ってしまうという特徴があります。

菅澤さんは塾で子どもたちに教えていた経験から、「ゆとり教育」の問題に強い関心をいただきました。自らが子ども時代に受けた教育と、今の子どもたちの教育内容とはかなり違ってきていることにも、少なからぬ違和感を覚えたことでしょう。2002 年から約 8 年間続いた「ゆとり教育」が新学習指導要領によって事実上方針転換し、学習内容が大幅に増加することになりましたが、はたして「ゆとり教育」は子どもたちにどういった影響を与えたのかを探ることが、この論文の課題となりました。

実は、菅澤さんが昨年 12 月半ばの時点でまとめた卒業論文の第一次原稿は、「ゆとり教育」が子どもたちの学力を引き下げた、というネガティブな評価を下していました。しかし彼はその後、中学校の先生にインタビューして、「ゆとり教育」について尋ねたところ、「ゆとり教育は必要だった」「ゆとりのなかで子どもたちにたくさんの経験をさせながら成長を促していくような環境のほうが、長い目で見て学習指導要領にある生きる力が身についていくと思う」という話を聞くことができました。

中学校の先生の話が影響したのかどうか、最終原稿では「ゆとり教育」のポジティブな面にも注目し、バランスの取れた評価に至っていると感じました。現場の声を聞くというのは、文献を読む以上に強いインパクトがあるのかもしれない。

学校の先生以外に、子どもや保護者などにもインタビューできれば、さまざまな立場からの意見をもとに、より深く考察できたことでしょう。

就職後も、教育の現場で、学力とは何かを考え続けていってくださることを望みます。